



長舌エルフさんの  
柔らかおくちで搾られたい！

## 魔王を倒した後の世界

モンスターの大量軍が町や城を襲うことはなくなったが  
その存在が消えてなくなるわけではなく

今も世界各地で散発的に被害が報告されていた  
真に平和になるのはまだ少し先だろう

勇者である僕は今も世界を放浪し  
人を害するモンスターを討伐していた

今日も魔物討伐依頼を受け  
洞窟を根城にしていた大型の魔獣を倒し  
町に帰ろうとした、そのとき—

長舌エルフさんの  
柔らかおくちで搾られたい！



「お強いのですね」



背後からの声に振り向くと  
柔らかな笑顔の女がいた

「はじめまして、冒険者様」



「私は、…ええと  
見てのとおりの者です」

長い耳をさし、はにかむ

亜種族はとて臆病だ  
きつと身分を明かすのは  
憚られるのだろう



何の用だろう？  
敵意はないようだけど…

「貴方様のおかげで

ようちやく外に出られます」



「よろしければ心ばかりの

お礼を差し上げたいのです」



外に出られる？

おれ？



…外に出られる？

おれ？



意図を汲みかね  
ふいに視線を返すと

意味ありげな笑顔で—

「戦いの後は…  
昂ぶりますぞしよ…?」



「戦いの後は…」

「昂ぶりますぞじょうり…?」

おもむろに脱ぎ

ゆつくり、耳朶に胸に

染み込ませるように甘く囁く





あまりに唐突な申し出で  
真っ赤になり、下を向いてしまっ

あまりに唐突な申し出で  
真つ赤になり、下を向いてしまっ—

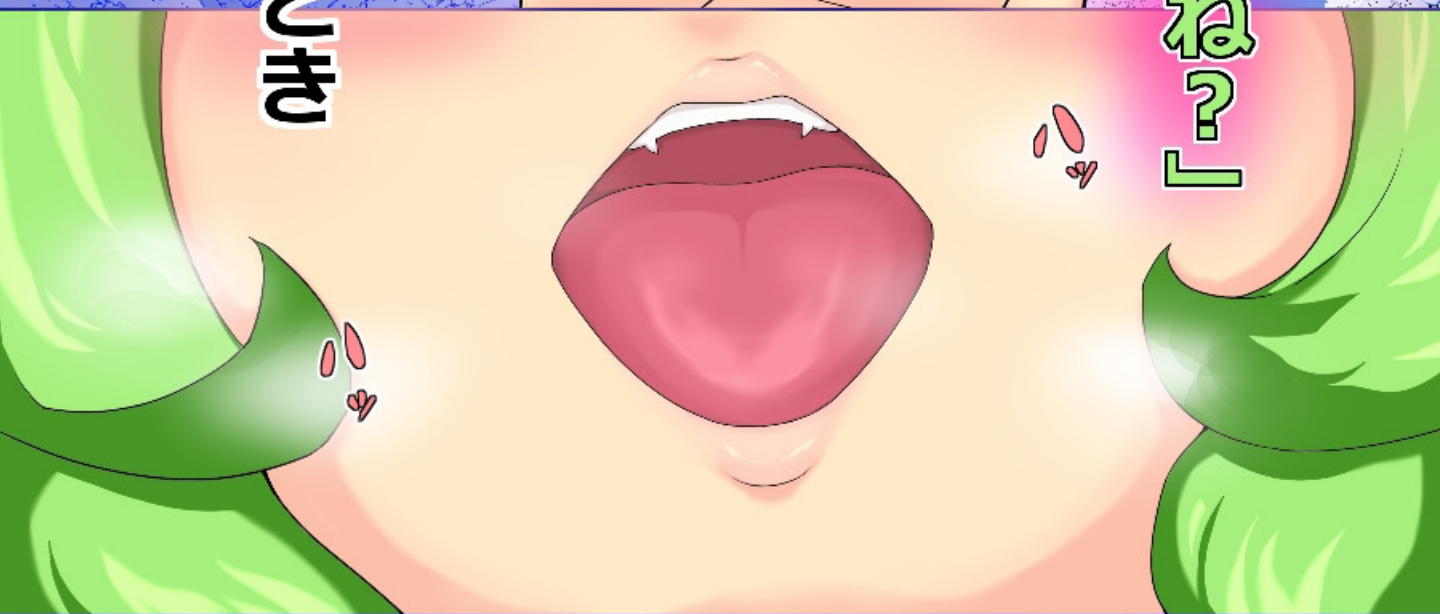


「ふふ、初心な方…」

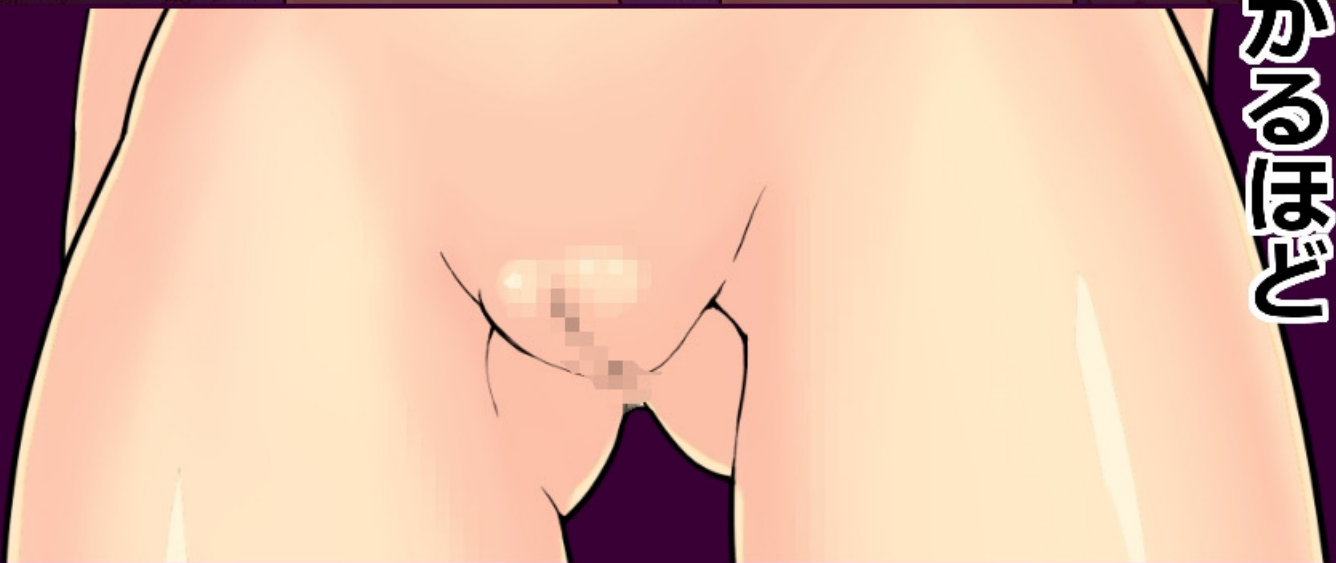
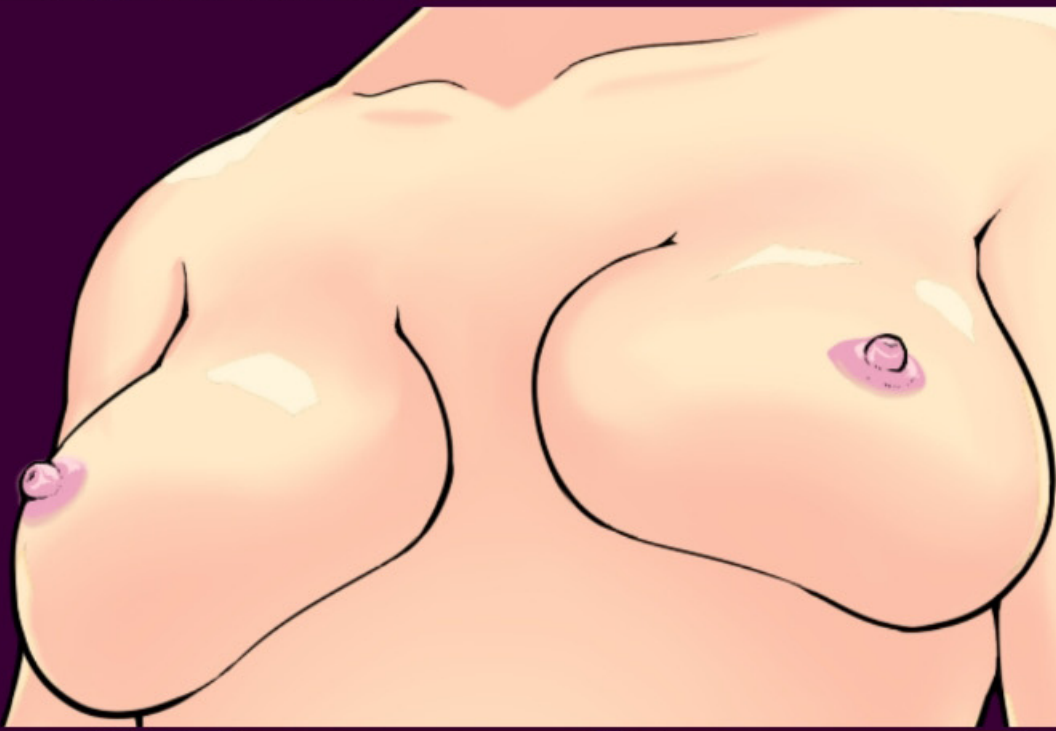
「ですが…

よろしいようですね？」

…そう、下をみたとき  
当然自身も見た



服の上からはつまりわかりかねるほど  
主張していた自身ー







服の上からはつきりわかるほど  
主張していた自身ー

ドクン、と心臓が跳ねた気がした  
…自覚して、しまったのだ



服の上からはつまりわりわかるほど  
主張していた自身—

ドクン、と心臓が跳ねた気がした  
…自覚して、しまったのだ

自分はどうしようもなく  
目の前の見知らぬ女に滾っている



「そんなにして頂けるなんて

ふふ…、光栄です」

いつものまにか

彼女はすぐ傍にいた

何か、甘い香りが…、する…



「御体も御心も  
魂までも癒されるよう……」



「御体も御心も

魂までも癒されるよう……」

「心から御奉仕させて頂きます」

